

國學院大學学術情報リポジトリ

コメント・討議の記録現代武道の人間開発力：
日本の身体文化から何を学ぶべきか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上口, 孝文, 山田, 佳弘, 植原, 吉朗, ベネット, アレキサンダー, 中村, 哲, 藤田, 大誠 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001224

〔コメント・討議の記録〕

パネリスト

上口孝文（國學院大學人間開発学部教授）

山田佳弘（國學院大學人間開発学部准教授）

植原吉朗（國學院大學人間開発学部教授）

アレキサンダー・ベネット（関西大学国際部准教授）

中村 哲（兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授）

司会・進行

藤田大誠（國學院大學人間開発学部准教授）

藤田 はじめに、新しく加わっていただいた上口孝文先生と山田佳弘先生から、中村先生、植原先生、ベネット先生のお話しのご感想と、あとはご専門の立場から、「武道必修化」を踏まえつつ、「現代武道の人間開発力」ということについてお話しただけだと思います。柔道については、上口先生から、一つ懸念のあるような事故の問題などにも触れていただければと思います。また、実は私の授業（日本の伝統文化Ⅱ（日本の近代化と生活文化））の中で、学習指導要領に書いてある武道種目の順番を問うのですが、「ア 柔道」、「イ 剣道」の次のウを空欄にしておく、必ずうちの学生は「弓道」と答えます。「正解は相撲」というふうに言いますと、学生たちが「何で？」というくらい、弓道は本学部の特徴になっています。そういった弓道が、学校あるいは社会教育の現場でどのように行われているかについては、山田先生からお聞きしたいと思います。



学校現場における柔道指導の問題点

上口 上口でございます。中村先生、ベネット先生、遠方からお越しいただき、演武に続きまして貴重な話を拝聴させていただきました。まず感謝を申し上げます。

中村先生のお話の中で武道教育の意義ということで何点が教えていただきました。まずは正しい姿勢、礼儀、作法、相手の動きと心を見る忍耐力と集中力の形成、それから達成感と意欲の形成、このような武道教育の意義をお話していただきました。いろんな武道種目がありますけれども、柔道がほかの武道種目と共通する部分、それからもう一つ柔道独自の特性と云うのでしょうか、それがありますので、私はこの中村先生の武道教育の意義にもう一つ加えたいなというふうに思っています。

ご存じのように柔道は、ほかの例えば弓道や剣道を考えますと、弓道というのは的の中心部分に矢を当てるために矢を放つ動作、剣道は面、小手、胴を打つ……打つという言葉が適当かどうかは分かりませんが……、そして突くという動作がありますけれども、柔道はその技の数というのが非常に多いですね。投げ技にしても、相撲は四十八手といいますが、それ以上の投げ技がある。固め技にしても、抑え込み技もあれば関節技もある、そして絞め技もある。技の種類というのはほかの武道に比べてかなり多い。

皆さんご存じのように、柔道というのは、ほかの武道に比べてかなり危険性の高いものであるといわれております。実際に柔道の練習による事故、死亡事故が一年間で数件ないしは十件に近いような頻度で起こっております。

来年度からの中学校武道必修化に向けて、今、全日本柔道連盟、それから各都道府県柔道連盟、学生柔道連盟がそれぞれ指導者の再教育を始めたところですけれども、やはり一番多いのは急性硬膜下血腫。これは頭を畳に強く打ちつけるといふようなことを言われていますけれども、頭を畳に打ちつけなくても揺さぶられたための硬膜下血腫もかなり報告されております、これからのような技量を持った指導者が実際に中学校の現場で指導していくか分かりませんが、この安全性の確保ということは一番大事なことであらうというふうに思います。

そこで文科省の学習指導要領を見れば、中学校一年生、二年生の技能の部分に、一つは相手の動きに応じた基本動作、基本となる技を用いて投げたり抑え込んだりするなどの攻防を展開するといふふうになっています。その中で実際に投げ技の中に、これは投げ技から受け身の練習方法の一つだと思われましても、体落としから横受け身、それから大腰から前回り受け身、膝車から横受け身、大外刈りから後ろ受け身、支え釣り込み足から横受け身という実際に投げ技の名称が出てきています、柔道の授業を初めて受けた経験のある人はよくお分かりだと思いますけれども、また、植原先生の報告にもありましたように、まず下ばきの紐の結びですね、これも剣道と同じような傾向を示しています。柔道の下ばきというのは両方の腰の部分から紐を引っ張り出して、強く締めて紐通しに両方を通して強く結びますけれども、それがどうしても強く結びなさいという指導をしてもゆるゆると結んでしまつて、少し歩いている間に下ばきがずり落ちてきて足に絡むといふようなことが起きております。そこから始まつて、帯の結び方、それから礼法、礼法も立礼

の仕方、正座の仕方、座礼の仕方、立ち方、これだけの動作ですけれどもかなり時間がかかります。頭の中では分かっているけれども実際に自分でやってみると、それができない。

その後には受け身の練習に入りますけれども、後ろ受け身、横受け身、前回り受け身などさまざまな受け身の練習の中で、やはり危険性の高いのは後ろ受け身であったり、前回り受け身であったりするだろうと思います。特に後ろ受け身の練習の場合、若い女性の肩というのは、首周りの筋力が非常に弱いものですから、通常の練習方法であれば後頭部を打つ可能性が高くなっていると思います。私は前に回って両方の腕を引いて、お尻をなるべく踵に落としたあとに後ろ受け身を実施させておりますけれども、それぐらいのやはり慎重な指導が大事だろうと思います。

ここで、体落としや支え釣り込み足など非常に高度な技が、何で中学一年生、二年生の投げ技のところに出てきたかな、という気もしますけれども、特に体落としという技は、技の掛け方によると、非常に危険が伴う技だと思われれますので、ちょっとこれはどうかという部分があります。

そのほかの練習の中に、かかり稽古、約束稽古、ここまではけがの可能性はほとんどありませんけれども、自由練習、簡単な試合というふうに書かれていまして、自由練習というのは、乱取りの中で自由に技の攻防を繰り返すというのが自由練習だと思えますけれども、果たして十回前後の授業の中で、自由練習、あるいは試合というのを持つてくる必要があるのかな、という気がします。柔道の投げ技の場合、中学校の学習指導要領の中に、相手を尊重する心、態度というのが出てきますけれども、

も、こと柔道に関して言えば、これだけでは十分ではない。柔道というのは自分自身の生命、身体を守るけれども、相手の身体、生命も守ってあげるといふ一つの約束事がなければ、大きな事故が出てくるのかなという気がします。

その自分の身体、生命を守るといふことと相手の身体、生命を守るという、これをやはり指導現場では徹底して教える必要があるだろうなと思っています。

これがどうなるか分かりませんが、私自身も注意深く見守っていきなというふうに思っています。時間がありませんので、山田先生のほうにマイクをお渡しします。

「基本しかない」弓道の相手は的と自分

山田 弓道担当の山田です。中村先生、ベネット先生、植原先生の話を伺ってしまして、種目は違うんですが、弓道としても同じポイントが多かったというふうに聞いておりました。最後に中村先生から、本日は多くの武道種目が一堂に会して、さまざまなそれぞれの形を中心とした演武を見られたことに意味がある、というお話をいただきました。私も、弓道は大学から始めてまだ三十年程度なんですが、まだまだ弓道の実力が伴っておりませんで、ほかの武道種目に手をつけるという勇気がないままここまで来てしまっているわけなんです、そういった状況の中で、本日いろんな武道種目を見る機会が持てまして、その中に共通性もいっぱい見られました。またそれぞれの種目ごとの特性の違い、理念の違いから、体配ですね、立ち振る舞いが違うということもあらためて発見することもできました。

やはりそういったそれぞれの発生の違いから、それぞれの理念の違いから、こんなにも違うところもあることができて、こういったものを、ぜひ今後多くの人に、多くの武道家に同じように多くの種目に触れるという機会を持ってもらえるのであれば、また自分のホームグラウンドとなる種目についても、より魅力的な部分を再発見できるのではないかとこのように感じました。

弓道なんです、武道の必修化に向けて全日本弓道連盟においても何度も執行部のほうが会議を重ね、学校教育の中でのカリキュラムの中で、どこまで安全に弓道というものを使って武道教育ができるのかということは何度も検討を進めているようです。そういった中で武道必修化を控える前から、弓道の授業を高校の授業の科目として取り入れている学校が数校あります。私の知っているところでは、茨城県のほうの私立の女子高校なんです、そちらではちょうど体育の先生が日本女子体育大学の弓道部の出身の先生で、学生時代から弓道をやられてきた。それもあって、環境が整って弓道の授業の展開を実際にさして、その先生から少しお話を伺うと、保護者の方々から非常に高い評価をいただいているという話を聞いたことがあります。

ただ問題は、「飛び道具」を使う種目ということになります。昔はそれで人を殺していたわけですから、取り扱いを間違えやすと事故が起こります。また場所も弓道場という特殊な空間を用意しないとかなかなかできないということもありまして、一応弓道も条件がそろえば、武道の種目として採用してもいいということになっていますが、現状ではなかなかその条件が揃わな

いというところが、厳しいところかなというふうに思っています。

ただ面白いデータがあるのですが、高校生のクラブ活動の中の武道種目の中で、今人気なのは弓道なんです。柔道、剣道のほうは今徐々にその登録人数を落としていっている中で、弓道は横ばいから少しちょっと上がっているかなというぐらいで、非常に人気のある種目として位置付けられています。高校の先生方に春先に聞きますと、「今年も三十、四十人っちゃってね」という話で、いかにその安全な指導をするかと考えると、このままだと大変なことになるので、どう「絞ろうか」という形で、今基礎トレをさせているんだ、筋トレをさせているんだということ、今高校の現場では、クラブ活動の次元ですが、非常に弓道が人気種目になっているという状況になっています。

当然弓道というものに憧れを持っていたりとか、姿勢に憧れたりとか、最近ではアイドルがプロモーションビデオで弓を引いているシーンが出たりとか、そういったものが手伝わって、非常にいいイメージが多分あるんだと思うんですが、現場ではそういう状況になっているそうです。

この弓道なんです、今日の演武でいくつもの種目をご披露していただいたわけなんです、弓道だけです。対戦相手がいまません。すべて自分と的、本日の場合は巻藁という形なんです、対戦相手がいません。よって運動の得意な生徒さん、不得意な生徒さん、男も女も、全くそういった条件は気にしないでいい種目になります。すべてが自分の行った動作の結果で矢が的に当たったり、矢が的をはずしたりというものが出てくるわけで、誰にも迷惑を掛けなくて済みます。



以前、一般教養の授業の学生さんと話をした中で、その子は自分から、僕は運動音痴なんですと。だから体育の授業でチームプレーを求められるバスケットや野球やバレーボールといった種目になると非常に苦しいんだと。周りに迷惑を掛けてチームが負けてしまったらどうしようというふうにも思っている。そういう話をしてくれた学生さんがいました。

その学生さんは、僕の授業の弓道を受けて、人に迷惑を掛けなくて済む、自分のペースで自分のリズムで弓に取り組めばいいということ、今まで体育の授業で非常に人に迷惑をかけたという恐怖感を抱いていたものが、弓道と出合えて少し取り組み方が、考え方が変わってきたというふうに言ってくれました。それはなぜかという、相手が動かないのであるからです。自分のペースで、どういうふうにしたら矢が的に当たるのかということを考えればいい。これは僕にはうってつけだというふうに言ってくれました。

本当にそういった意味では、武道種目がいっぱいある中でも弓道は相手が的である、でもこれは実は相手は的ではなくて、相手は自分なんです。自分の心理状態、自分のフォームというのがどうなっているかによって、矢が当たったり外れたりするので、実質的に向かっているつもりでも、それは自分に向かっている今というふうになっているのかというのを常に問い掛けながら、フォームを探すという形態を取っています。そういった意味でも実は弓道というのは、いろんな人に向いている種目ということが言えるかと思っています。

現在、この大学でも授業で展開しているのですが、学生には私は毎回授業の時に当てるためのコツを口頭で、きょうのボー

ントはここね、という形で披露します。各学生はこちらから言われた当てるためのコツを自分で考えて、それを自分の体で表現して、それが当たっていれば当たるね、その解釈が、その表現が間違っていれば矢は当たらない、ただそれだけだよということ、毎回一つずつ二つずつコツを発表して、自分で答えを見つけないという形で、授業の中ではある程度の安全上の約束事を守らせて、あとは自分でやれという形態を取っています。そうしますと学生は、最初は当たらないですね。何で？という形になります。何で当たらなかった、何でか……この何でっていうのが多分授業においても非常に学生にとってはいい刺激になるんだと思います。その何でを探すんだよという投げ掛けをして、毎回学生には苦しんでもらっています。

そうしますと、いずれポコンポコンと矢が的に当たる現象が出てきます。約三十五名ほどの授業の中で、一人、二人、三人、四人というふうに、授業の回数が進んでいきますと、的に矢を当てられる子が出てくるんですよ。同じようにスタートしたのにもかかわらず、当たる子と当たらない子が出てくる。それもまた考えなさい。当たっている人はどこに違いがあるんだろう。何にこだわっているんだろう。そういうふうにして、すぐに僕は答えをあまり言わないようにしています。自分で考えなさい。すべて気付かない何かがあるんだよという形で、毎回当てるための安全操作上の話をするのですが、すべて学生に自分で探せという形でやっていきます。そうすると学生は当たる人の観察を始めます。当たる人のフォームの共通性は何なのか、あいつが当たるのはいったい何なのだろう、見ていて分からなければその学生に、何で当たっているのということをこそこそ聞

きに行っている子もいます。そうしながら自分にそれをフィードバックして、一生懸命また試行錯誤をしていくと。

最終的には学生にこう言います。「弓道は基本しかない。応用というのがないんだ」という話をします。その基本にどれだけ忠実に体を形にはめていくことができるかということを追求するんだよと。それが忍耐力、それが工夫、努力ということになっていくのではないかと。という話をして、それを繰り返していく時にある日見つかる。矢が当たるという感覚を、イメージを一致させることができるようになってくる。先ほど中村先生が心と体の一体化の体系というお話をされたのですが、まさしく弓道もそうです。急にやってくるのです。当たる時の感覚。あとはそれを味わったらそれを探せばいいねということをやっています、学校の教育としても弓道というのは、自分のペースでそれを探す作業ということを繰り返してやるだけになりますので、いろいろとそういった考える機会を持てるという意味でも弓道は武道教育、学校の教育の教材としても僕はうってつけではないかというふうに思います。

ただ、上口先生がいろいろと事故が起きているというお話をされていたのですが、弓道でもやはり危険な道具を扱いますので、学生たちにはその点を十分に指導した上でやっているわけなんです、悲しいことにやはり弓道界でも時折弓矢の事故が新聞報道などでも出ておりまして、絶対に安全というわけではないという部分があり、指導者としてはやはり経験を積んだ方が指導しないといけないんだろうなというふうに思います。

本来弓道は一对一の指導ということが一般的なんですが、学校の授業の中では一人の教員に対して三十五名、四十名という

大人数の一斉指導をしないといけませんので、そういった限られた時間の中で効果的な安全な指導をする一斉指導法ですね。そういったものをどんどん開発していきたいですねと、せっかくいい効果が得られる武道に指定されている弓道も、大きな事故を起こすと多分それでストップがかかってしまうのではないかという意味では、早くその一斉指導法、効果的なものをやはり見つけていく必要があるだろうなというふうに思っています。以上です。

学校と地域社会、普遍と特殊、競技と基本・形

藤田 ありがとうございます。基調講演、ご発題、今のコメントを踏まえまして、まとめた上でフロアに聞いて、また先生方からリプライをいただこうと思っております。

今のお話を受けて、何点か私なりに整理をいたします。

まず、山田先生や上口先生のお話、それから中村先生、植原先生のお話も学校現場における武道のお話でしたが、もちろんそういうことが中心になるわけですが、このシンポジウムのテーマは「現代武道の人間開発力」ということです。学校にとどまらないと思っています。

発題の二つ目のベネット先生の世界的な中で見た武道という「国際化」を踏まえたお話がありました。世界中に広がっている武道は、もちろん学校単位でやっている面もあるわけですが、それ以上に、これは個人的なことですが、私はうちの大学で空手道をやってきまして、学生の時にですね、四年生になる前の春休みに一人でドイツに稽古をしに三週間ぐらい行きました。

ドイツでは、ベネット先生のおっしゃるように、道場が非常に多かった。それも、単位が学校ではなく、やはり地域社会におけるクラブチームのようなものでした。そういう社会教育ではありませんけれども、社会の中における武道の役割、ベネット先生によれば、外国で広まっているのが、日本のコンテンツの一つとしての武道であるというお話だったと思いますが、例えば教員になれる方にしても、学校の現場のいろいろな問題のみならず、そういった学校と社会の両方の観点から考えていく必要がある。地域社会において武道の道場は、もう少し幅広い人々が寄り添う場であるという面を有していると思います。

もう一つベネット先生のお話に即して言いますと、最後に「普遍」というお話をされました。普遍の反対というのは「特殊」というか、具体的には和 문화あるいは日本文化、日本の伝統文化というのが特殊だとすれば、それが普遍的に受け取られる場面があると。そういった意味で世界に広がっているということでありますと、その一つが植原先生のおっしゃった「不便の効用」、例えば装い、服装、スタイル、そういったもの、あるいは礼法というような、通常でも挨拶はしますけれども、あるいは形で面と向かい合って作法として行うという、一種のこれは日常的ではない、あるいは近代的でないと言っていいたかどうかは別として、そういう面がある。その日本文化としての一種「特殊性」というものから、「普遍性」を持ったスタイルだとかいったものが生み出されているという面があると思います。こういったものが「普遍」と即つながるかという点、実はより「普遍」に直接つながっているのは、「心」の問題という点とでした。ただこれは、中村先生もおっしゃったように、結局、

心・技・体、日本の身体文化が外国と違うところ、「道(ドウ)」、「道(みち)」と付けているのは、基本的にこういった心・技・体というものを伴うという考え方であるといえます。それは突き詰めていえば、世界中にいくらかもあるのかもしれませんが、こういう形で打ち出していくというのは、やはり日本から発する一種の文化であると。それが「普遍性」を持っているとすれば、その「心」の問題というものは何なのかと。「精神性」ですね。その「精神性」が何なのかということで、ベネット先生によれば、それは「宗教」に代わるような部分を持っているというお話がありました。ですからその面は、学校のみならず、地域社会の武道の現場において、どのように考えられてきたのか。

恐らく上口先生もおっしゃったように、いきなり「競技性」といいますか、そういったものよりも前に心掛けることを教えること、そういった指導がなされていけば危険性も減るということなのでしょう。これは「形武道」というお話がありました。が、言い方を変えれば「基本」、柔道であれば受け身も含めた前提となるそういった「基本」の重要性です。空手の基本でも、まず「受け」から始まって攻撃に移る。初めに「払い受け」をして、そこから仕掛けるといような、これは有名な言葉で「空手に先手なし」というのがありますが、そういうような基本を押さえた上で技を掛ける。それとともに、世界に広まっているもう一つの面としては、柔道、あるいは空手はもうその最たるものですが、競技性、もうスポーツに変わっています。その部分を教育現場や地域社会の中でどういった形でまず伝えていくのか、あるいは指導の順番をどういうふうにしていくのか、そういう問題が挙げられるのではないかと思います。

ちょっと雑多なまとめになりましたけれども、こういった「国際化」も踏まえていきますと、学校と地域社会の問題、それから普遍と特殊の問題。その中における具体的な不便と利便の問題。近代と近代代もしくは前近代の問題。このあたりは議論がありますけれども、このような我々の日常に係わる問題。それから心の問題ですね。競技性と基本、形の問題というようなことが挙げられると思います。こういったいろいろなテーマが出てまいりましたけれども、フロアにちよつと振りまして、ご自由に、あるいはご意見でもいいので、何人かにお話を伺って、その後にお一人ずつお話を最後にいただいて終わりたいと思っております。いかがでしょうか。なんでも結構です。ご提言でも素朴な質問でも結構ですので、先生方がいいがですか。

外国で武道が普及するきっかけとは

加藤季夫 きょうはいろいろ貴重なお話をありがとうございました。ベネット先生にちよつとお尋ねしたいのですが。世界で空手が一番人口が多いことですね。それぞれの武道に関して海外での始まるきっかけが、僕はかなり大きなウェートを占めているのではないかと思うんですね。例えば空手であれば大山倍達さんの話やそういう外国で日本の武道が広まるきっかけがその競技人口に影響していることは考えられないのでしょうか、というのをちよつとお聞きしたいです。

ベネット ありがとうございます。そうですね。一口に「武道」と言っているんですけれども、それぞれ武道は違うんです

よね。「球技」といったらラグビーやサッカーや野球などが違うのと同じように。だから武道はどうかのこのこととは、ちよつとどうかなと思います。そういう意味で、では、武道をやるきっかけといいますか、それが空手であれば、また柔道、剣道などやはりそれぞれ全然違うんですね。また時代も違う。柔道に関しては、嘉納治五郎が一八八二年に講道館柔道を創って、それからものすごく積極的に海外、ヨーロッパ、アメリカに行つて自分が作つた柔道を普及しようと。だから柔道はものすごく早い時代から海外に普及している。また講道館柔道以外の柔術家たちは海外に行つて、ミュージックホールで向こうのでかいレスラーたちと勝負して、こんなちびの日本人がどうやって勝つんだというような、そういう不思議な風景も明治後期からあつたわけですよ。

だから柔道や柔術などが国際的に普及したきっかけというのは、また空手とは全然違う。空手の場合ですと、もともと日本ではなくて沖縄から大正、昭和初期に日本に入ってきて、海外にそれが行き渡つたのが大戦後になってからです。沖縄からハワイなどに移民した人たちはさておき、大きなスケールで普及するようになったのは戦後です。それがいろんなルートがあるんですけども、大きく二つ言いますと、一つはGHQで、日本は戦争に負けまして、それで日本に米軍の人たちが空手つて実戦的な、これは実際に使えるなど。それで日本に滞在している間にそれを学んで、しばらくしてから自分の国に帰つて道場を開いて、それで少しずつそれが人気が出てきたというのが一つのルート。

もう一つは日本から派遣された人たちですね。例えば松濤館

空手だったら、金澤弘和先生やそういう方がヨーロッパやアメリカに行つて、たまたまタイミングよくいろいろ……中国武術その後香港映画の影響など、そういういろんなことが混ざつていて時代によつてまた違う。

例えば空手に関しては、特に人気が出てきたのは恐らく一九七〇年代ぐらいからと思うんですけども、それが空手というのが、何よりまずその精神文化というよりも、けんかで勝つということが一つの魅力だつたと思うんですね。それから日本人が行くようになってから、その精神性が強調されるようになって、それで日本人がみんな武道の達人だという、それで精神的なことを教えてくれるようにすごく期待されるようになったんですね。それから動機が変わっていくんですね。その延長線として「ベスト・キッド」(米国、一九八四年)という映画がありましたよね。それでパット・モリタが日本人の空手の先生の役をして、その空手にどれだけ深いものがあるかということとをすごく強調するような、そういう映画も大きな影響を与えるようになった。結構バラバラで何が一つのきっかけだということとは、非常に言いにくいわけですね。

また剣道に関しては、それも日系は戦前からアメリカのほうではやっているんですけども、ヨーロッパやアメリカ以外の国ではやるようになったのが完全に戦後ですね。一九七〇年代以降。それがまた空手や柔道と違ってあまり実戦的でない、だからそれこそ剣道のほうが、もつといわゆる武士道的な考え方が潜んでいるのではないかということとでやり始める人が多いんですね。特に剣道はほかの武道に比べたら上達がそんなに早くないものですし、柔道や空手だったら一つの技を覚えたらその

効き目がすぐに分かるじゃないですか。剣道はそうじゃないんですよ。だからそれがまた違うことを求めてやり出す人が多い。剣道の場合ですと大体中年の人が大人になってからやっている人が多いです。やはり何かを求めてやろうと。だからそれぞれ全部違うんですよ。だからそういう意味でその質問に対してはあまり明確に返事できないようなことなんですけれども、それぞれ違うということです。だからそれを分かつと思つたら、まず一つ一つの武道を別に分析して、そしてまた時代をやはり一つ一つ見ないとちよつと分からない。結構バラバラということなんですよね。結論から言うとそういうことです。

武道修行における師弟関係と学校教育の問題

阿部弘生 健康体育学科助手の阿部です。ちよつと話をしなければと思つて。今いろいろな先生方の話を聞いて、まず山田先生が先ほど、形に関して、団体教授をしなければならぬとおっしゃいました。だけれども私は、大きな特徴の一つ、特に形とすることに關した時に、そこには必ず師弟関係が入らなければならぬと思うんですね。特に「人間開発力」という場合、誰がそれを「認める」か、形武道の場合は、師匠しか弟子の上達を認める人がいないわけですよ。先ほど演武について、居合道と杖道の例については中村先生からお話があり、私も植原先生と先ほど杖道を演武しましたが、あれは「演武用」であつて、例えば、実際には師と弟子が立ち合つての「演武」ですから、お互いに技が効いたようにとか、僕の太刀を植原先生が何となくやつたように見せてくれるとかいうのがあるんですけれど、

本来、そこには、やはり師匠と弟子が実際に立ち合うところの必死さがある。居合に關しても、やはりパツと見た時に誰の弟子か大体分かるんですよ。

何々流、例えば中村先生は伯耆流をしていらつしゃいますけれども、結局それは伯耆守という師がいて、その師を受け継ぐまた師がいて、中村先生もそのお師匠さんの一人からその伯耆流というものを受け継ぐというその師弟関係というものが必ず介入する。一流の先生たち、特に「形武道」に關しては自分の師は誰だとはつきり言う人じゃない。

だけれども、昨年度、実は杖道の団体教授をなんとかしてできないかということで、本学の特別推進研究でやらせていただいたのですが、学生たちとともにお互いのそのストーリー性を構築するということに意識を置いたものですから、形というのはストーリーを二人で作っていくと。ですが、私は授業の最後に全員と形を合わせたんですよ。そうしたら急に反応が違つて、「あ、やつぱり何か入らなきゃいけないね」と。

「国際化」を考える時もそこはすごく難しい問題で、先ほど「ベスト・キッド」でモリタが教えた。だけれどそれは弟子が雑巾をかけるとかペンキを塗るといふのを、師匠から言われたことを意味があるのかないのか分からないけれど、黙々とやつていく。師匠と弟子しか分からない。ほかの人が見ても分からない。でも二人にとっては、ほかの人が分からなくてもいいという。その師弟関係の重要性和団体教授の難しさというんですか。その師弟関係を除くことで語っていいのかなという、そのバランス……ですからどちらもいい点はあると思うんですね。だけれども、そこで本当に武道というものを伝えていくと考えた時に、

難しさが入り込むのではないかと思っております。これは中村先生にちょっと伺いたいと思っております。

中村 居合道やそういう武道を、個人的に、要するに師匠から学ぶ、こういうようなつながりであれば、基本的にはやはり師匠とのつながりというのがかなり重視される。学校教育という場では、それは要するに指導者、何らかの標準的な一つの指導者がそういう関わりでやはり考えなくてはいけない。その時に学校教育の場合は、きちんとした共通のカリキュラム、そういうものをきちんと明確に打ち出せるかどうかなんですよね。だから居合や武道の練習はまさに直接的にはそういう師匠をモデルにして学ぶというのが当然の関わりです。師匠関係といいますが、弟子と関わるというのは、まさしく個人的な道場やそういうつながりの中でそれは非常に良い。しかしそれを学校教育の中で持つてくるということは難しいのではないかと。学校教育に持つてくるためには先ほど言いましたように、きちんとしたそれなりの一つのカリキュラムを打ち立てるということが必要ではないかと。

阿部 実は同じことを昨年僕も思っていたんです。ですが、杖道の場合というのは、特にその技を掛ける面白さというのが実はあるらしくて、それで僕がハツと思ってしまったんですね。その動きさえ体験させて、お互いのストーリーをやればいいんだけれども、実際、繰付といって太刀をこういう……でもはっきり言って下手な人だったら掛からない。だからそれなりにできるやはり二人でしか感じられないとかある程度能力を持つ

た師匠というものを考えたほうが、そこで妙に学生の意欲が1つと上がってしまったものですから、そう言ったことが予想以上にアンケートに書いてあったので……。

中村 それは要するにですね。これは師匠から教えられるというの、常に教えられるわけでもなんでもないわけですよ。一つの形のモデルとして示さないといけない。形といえば簡単に言えば、漢字の筆順なんですよ。筆順を一応教えられたらその筆順に基づきながら、やはり自己学習する中で技の動きやそういった体の動きだとかは、そういうのはやはり自己発見していく面があるかと思うんですね。だからそれは要するに師匠であろうがなんだろうが、練習する中で自分なりに一つの技の掛け方、体の体捌きだとかそういうところが、一瞬、「あ、自然だな、うまくいったな」と。書道を書いていても、字を書いていてもいろいろ練習する中で、「うん、これはなんか自分でもいい字ができたな」という一瞬があるんですよ。それは技習得を通した一つの練習の中で感じる一つの方法ではないかなと思うんですけどね。

安野功 すみません。学校教育のほうで質問させていただきたいと思います。中学校の体育で、心と体を一体に学ぶという意味から武道が必修になったというのは、非常にいいことだなあと思っています。実際には横浜市内のカリキュラムでも、一、二年では必ずどこかで一回、三年では必ず選択の中に入っていると。そうすると中学校の保健体育を目指す教師は必ずどこかで教えることになるだろうと思うんですね。反面、先ほど山

田先生のお話の中で、経験を積んだ方が指導しなければならな
いというふうにおっしゃいました。その場合の経験というのが
現実には難しい学生もいるんじゃないかなと思うんですね。そ
こで、中学校の保健体育を目指す学生が、例えば、最低限大学
で学んでおくべきことや身につけておいたほうがいいなとい
うことがあれば、どなたでもいいんですけれども、私もちょっ
とそういう関係の授業を持っているものですから、これから参
考になるかなと思って、ぜひ聞かせていただきたいと思っています
ので、よろしく願います。

藤田 それではもう時間ありませんので、最後にお一人ずつ
お話しいただく中で、今の安野先生の問い掛けにもお答えいた
だければいいのかなというふうに思います。あと、先ほどの山
田先生が弓道の特色とおっしゃいましたけれども、ほかの組ん
でやったり、組んでやらなくても一人でやる「形武道」もある
わけですが、その一人で修練を積む、相手というものがあ
るとか、そういったような、結局自分一人で最終的には修練を
積んでいく、当たり前ですけども、そういった部分に持って
いく前の、さっき阿部先生がおっしゃった師弟関係と言いま
すか、動機付けのみならず、そこに持っていく「推進力」みた
いなのが、どういうふうに学校教育の中で考えられるのかとい
うお話だったと思います。安野先生も実際にどうしたらいい
かというお話だったと思います。

ですから、最初に植原先生からお話をいただいて、山田先生、
上口先生、ベネット先生、中村先生、一言ずつで結構ですの
でお話しをいただければと思います。よろしく願います。



「師弟同行」の姿勢と経験豊かな指導者の必要性

植原 安野先生のお話は、要は経験の少ない教員が武道を指導するという場合、どう対応するべきかという理解で良ければ、私はキーワードといいますか、これですべてが解決というわけではないのですが、キーワードの一つとしては「師弟同行」、これがヒントになりはしないかと考えました。つまり、我々は武道を長年やっていても、ここで完成ではないのだと。常に自分がいつも教える立場、相手は教わる立場というところに甘んじるのではなくて、自分自身も常に「修行」といいますか、「修行」と言えば口幅つたいですけれども、積み重ねていかないと、という思いがあります。であれば、学校の現場でもやはり先生が常に上の立場というのではなく、一緒に磨いていこうよと、一緒に鍛えていこうよという姿勢で生徒と取り組む中に、学校教育の中で武道が活かされるヒントがありはしないかというふうに思います。あまり具体的になくて恐縮なんですけれども。ついでに言うと、私はこれで最後にまとめたいのですけれども。日本の教育力といいますが、「人間開発力」と言っているのでしょうか。というのは、やはり日本の文化の中にあったと思うんですね。体と心を鍛え困難に打ち勝ち、危機に立ち向かう強さを身につけ、礼儀作法を習い、人と和し、思いやる心を持ち、命や自然を大切にすることを磨く、その方法論というのを私は武道に見いだすと。特に日本の伝統文化の中でその方法論を見いだすことは武道の中でできるんだというふうに信じておりました。それは常に、生徒も先生も共に歩むという中に必ず見いだせると考えております。中途半端ですみません。以上です。

山田 経験がある指導者が必要だということの話なんです。やはり、多くの武道が相手の体を借りて投げたり投げられたり、打ったり打たれたりということになるわけなんです。少なからずやはり相手がいて成立するのが多分武道だと思うのです。その際、やはり相手に少なからず危険が及ぶかもしれないという危険性が高まる中で、初めて技が決まったり、決まらなかったりということを通して勉強していくのだと思うのですが、よって、そのやはり相手を危険に一時さらすかもしれないということをしつかりと認識をさせられる力を持った教員が必要かと思えます。その上で、やはり危険なだけでも、それをやろうとしている人間の心構え、そしてそれに取り組む姿勢、準備、それができてこそ得るものが大きいということをしつかりと、自分の言葉で、また態度で示せる教員というのが、当然必要になってくるのだというふうに思います。

上口 経験と指導力という話ですけれども、柔道の指導をする場合、やはりふさわしい人物というのは、高校、大学と課外活動では毎日やって、なおかつ試合に出ていることが望ましいと思います。ただし、本学の健康体育学科は、そういう学生は少ないわけで、それでもやはり教員を目指すということであれば、週に最低でもやはり二、三回は練習をする必要があるのかなと思います。それはどうしてかと言うと、経験年数が長い者というのは、学生のその動き、そして学生の心理状態を見られる、そして危険な場面が来る前に止めて指導できるという利点があるかと思えます。やはり経験が少なくと学生の動きを見られない、あるいはその学生の心理状態までは見抜けないだろ

うなというふうに考えております。今、本学部教育実践総合センターの「未来塾」で火曜日と土曜日に、昇段を目指すということで指導していますけれども、このレベルでは少し中学、高校で指導するには不足部分があるかなということも痛感しております。以上です。

ベネット 武道というのは危険だからこそ意味があるんですよね。危険だからこそ武道なんですよ。危険だからこそほかのスポーツと違うという気がするんですよ。そういう意味では、今先生方がおっしゃったように、危険なところがすごく重要なんです。私が日本の学生に剣道を授業で教えたりするところがあるんですけども、防具を使わず木刀だけです。木刀による剣道の基本技の稽古法というのがありまして、木刀を使って寸止めなんですよ。ちょっと失敗したら相手を打ってしまふ。木刀とか痛いですよ。気をつけないとその切っ先が目に入るかもしれない。だから、みんなやはりちゃんと意識して、ちゃんと集中して、それでやはり相手を信用してやらないといけない。それが面白いことに、感想文を書かせると「いやー、最初緊張しました。ともかく何か分からなかった」って。

また相手が替わるわけですよ。違う人とやったりすると、本当に大丈夫かな、逆に打たれるかもしれないし、もしくは相手を打ってしまうかもしれないというような緊張感がたまらないみたいですよ。学生の感想文の中に出てきて、なるほどと思ったのは、私にとっては発見だったんですけど、「これが礼ということですかね」と言うわけですよ。相手に対する思いやりとその信頼と。ああ、なるほど。だからこの危険があっ

てからこそ武道です。

だけれども、それがあからこそ、あまり経験のない指導者には指導してほしくはないです。あまり経験のない人が指導をすると、はつきり言って武道を教える意味もないし、それで危険以上のものになるということです。そういう意味で、ほかのスポーツを指導する場合は、ある程度ごまかしはきくと思います。野球やサッカーなどはあまり自分がやっていなくてもある程度指導ができると思うんだけど、武道はそうじゃない。武道は中途半端に人に教えると中途半端な結果に終わるし、武道の良さをうまく伝えることはできないと思う。となると、現状で言いますと、今度必修科目になると思うんですけども、はつきり言って意味はないと思います。

私は武道が大好きで、どんどんどんな人にもやってほしいわけです。今武道離れ現象というのがあるとよく聞くんですけども、ますますそれが悪化していくのではないかなという気がして、非常に不安です。だから、さっきの質問に対してあまり答えになっていないと思うんだけど、やはり文科省の典型的な、計画性のないことでこういうことになってしまったので、これからの大きな課題として、どのようにちゃんとした指導者を取り入れて、それで指導できるようにするかということは、「命」だと思ふんですよ。これからもこの武道の必修化がうまくいくかいか。それと武道に対する「未来」ですね。武道の未来はどうなるかということ、これも大きく懸かっていると思うんですよ。だからこれは深刻な問題です。これは、ちょっとだけ講習会を受けて、その指導法を学ぶというものではないのです。ちょっと言い過ぎたかもしれない

けど、これで終わりにしたいと思います。

教育の観点から武道を考える

中村 和文化を含めて、武道などに対する一般的な考え方は、専門的な人がこういう形で教育を受けたと、こうでなくてはならないと、武道の本質はこうだと、そういう形で教育を考えてしまうんですね。私は反対なんです。むしろ教育から武道を考えなければ、学校教育の中で取り組むことはできません。だから極端に言えば、「剣道遊び」でもいいのです。「柔道遊び」でもいいのです。それは要するに、目的からいって、子どもたちをどのように、どういう目的で形成するかという中でカリキュラムを作ることが重要なんです。往々にして、もう武道家だから武道家の自分たちがやったらという論理で、あるいは芸能関係者もそういう論理で教育してしまうんですね。そうではないです。学校教育は、先生がやらないといけない。子どもたちがやっていなくてはならないのです。子どもたち自身でも、そういう教育的な関わりはどんどん見いだしていくわけです。尺八を知らなくても、ちょっと教えたことによって、先生より学生が、子どもがお互いにそういう方法を教え合えるわけですね。だから私はむしろ教育から武道というものを活用するべきだと、それだけの発想です。

それからもう一つ国際化から言うと、これはもう韓国の動きを見たら分かるんですね。韓国は武道だけではないのです。KPOP、映画から、これはもう政策として文化国家として世界に発信した施策ですね。予算も全然違う。伝統文化はそう

いう専門のショーもあるわけですよ。それはやはり文化というものが世界に通用するものだという、そういう施策の基でそれだけをやっているわけですよ。ところが日本はそういう文化的な価値がありながら、残念ながらその価値を十分まだ理解していない。せいぜいアニメだと。アニメの前に、武道にしろ何にしろ、日本の文化というもののはそれだけ価値があるのだという見直しが必要ではないのかと。そういう意味では、国際的な働きかけの一つの柱としては、バックとして国およびそういうような関わりの施策を強めていくことが必要ですし、やはりその基盤に武道がなるべきだと考えております。

藤田 ありがとうございます。それでは終わりたいと思いますが、最後に私も一言。お話を受けて、必修化に関しても本当にいろいろな問題点があるということなんですが、これを奇貨とするか、あるいはベネット先生のおっしゃったように下降線をたどるような結果になるのかというのは、これは教員、あるいは大学の教員も含めてそれだけでは難しいかもしれないけれども、それをいかに良くするかという視点が必ず必要になってくると思います。

武道そのものを本質的に考えていきますと、さっきの師弟の問題や心の問題も含めて、そんな数回でできるものではないと。これは当たり前なことだと思います。しかし、すでに明治時代においても、「武技体操論」という形で体操化しようとしてそれさえもできなかった。明治末期にようやく中学校で武道を何とかできるようになったというのが、近代の学校教育における武道の取り扱いです。ただし、嘉納治五郎が言っていたように、

やはり実際に学校教育の中、あるいはそういう若者に対する教育的価値というものを踏まえ、「武術」から「武道」へという近代的な展開、そういった体系化をしていったわけですから、その面をいかに現実のものにするべきか、ということを考えていかなければいけないのではないかと思います。

ですから、指導者の問題にしましても、学校だけで閉じるのではなく、どう地域社会、あるいは町道場、それで難しければそういった関係者となるべくネットワークをつないで、学校のみでやるということではない、という方法もあってもいいのではないのかというふうに思います。ですからこれは、学生さんも含めて、こういう課題を設定しながら、なおかつ現実的にどういうふうにそういったものに対処していくのかという非常に難しい問題が出てきますが、教員になるということ、あるいは社会に出て指導者になるということは、単に武道の指導者になるということに留まりませんので、そのあたりは、これは我々も含めて大きな課題ではないかと思っています。

ちよつと話が長くなりましたが、これでこのシンポジウムの討議は終えたいと思います。ありがとうございます。

それでは最後に、本大会シンポジウムの共催団体である本学教育開発推進機構の機構長、加藤季夫先生から一言いただいて閉めたいと思います。よろしくお願いいたします。

加藤 今日皆さん方、長い間ご苦労さまでした。また前のほうでシンポジウムをされた先生方、今日はどうもありがとうございます。國學院大學には教育開発推進機構という組織がありました。大学の教育をより良いものに構築していくという組

織で、そういった面で、人間開発学会の理念とも共通するものもありますので、第一回の大会から共催という形にさせていただいております。

今日は非常に面白いパターンで展開されました、第一部は演武、第二部は公開シンポジウムということで、第一部の演武を見させていただきましたが、鍛錬することはすごいことだなあとということを実感させていただきました。恐らく、今日出てきた学生の多くは来年体育の授業で武道関係を選択するのではないかとこのように思っておりますので、来年のちよつと健康体育の授業は楽しみだというふうに思っています。

第二部のほうでは、中村先生とベネット先生のお二人の方を中心として、武道教育の意義と展望という形でシンポジウムをなされましたけど、なかなか難しいテーマだという気がいたしますが、お二人の先生のお話を聞いていますと、やはり武道というものが人を律していく、あるいは人間を作っていく一つのきっかけにはなるというふうに実感いたしました。そういった意味でベネット先生は世界の宗教心の強さということで説明されましたけれども、中国が、ほとんど宗教心がなかったということ、最近子どもが車で轢かれても放っておいたということと妙に関連があるなという気がいたしました。

そういった面では、やはりどういう形の武道教育になるかは分かりませんが、武道教育を行っていくことは、従来日本では地域社会、あるいは大家族が子どもをいろんな意味で指導し、あるいは叱って、サルから人間に仕上げていったわけですが、その代わりをひょっとしたら学校現場の武道教育が担えるかもしれないということで、今後の日本の武道教育がど

人間開発力
何を学ぶべきか

山田 誠
山田 誠
山田 誠
山田 誠
山田 誠
山田 誠

司
山田 誠